

11 医学教育への薬学の協力

中 室 嘉 祐

慶応四年三月明治天皇は浪華に行幸され街に溢れる病人療養の沙汰書を出され、明治二年大福寺に仮病院が開設、院長は緒方惟準（コレヨシ）、教師は長崎養生所残任期間の Baudin である、熱心な和蘭医学の教育が併せ行われた。明治五年文部省は学区制改革を行ない大阪を廃校とした。大阪府民は西洋医学の病院の廃止を惜しみ寄付金を集め明治六年二月一五日西本願寺北御堂境内に洋式の府立大阪病院が新築された。院長は高橋正純、教師は Emeritus である。この府立大阪病院では熱心な西洋医学の教育が行われ、明治一二年中之島へ移転し明治三六年大阪高等医学校病院、大正四年府立大阪医科大学に昇格した。これら歴代の薬局長は病院薬局業務のほか、医学校兼任教諭として、薬局員の一部は医学校助教諭・

助手を兼任して医学教育に協力した。

大阪病院薬局長乃美辰一（東京帝大製薬科卒）は大阪医学校教授を兼任し医学生に物理学・化学・植物学・動物学・調剤学を教授し医学校試験委員をも兼任し医学生の卒業認定をも行った。明治二年、後任に高知病院薬局長原養林が大阪医学校教諭を兼任し薬局員山田久兵衛は助教諭を兼任して医学教育に協力した。原口の後任に明治二三年陸軍一等薬剤官町田伸が薬局長兼教諭に、川岡守三調剤手は医学校助教諭を兼任し医学教育に協力したが町田が日清戦争に出征し、明治二七年蓮井宗吉（東京大卒）が薬局長兼教諭を兼任し、明治三〇年大槻式（東京帝大大学院・長崎医学校教授）が薬局長兼教諭に就任し和田録治・三木倉次郎薬剤員は医学校助教諭を兼任し医学教育に協力した。大槻教諭の医学生への教育は極めて厳格で、病院の診察室から薬局へ回される処方箋の記載に不備があると自らその処方箋を持って医局まで出向かれ、教え子であるその医師を指導されたので、医師たちからも大変恐れられていた。大槻薬局長は当時最高の化学書 Beilstein Nandbuch をはじめ化学・薬学書を薬局に揃え

た（明治時代病院薬局に専用の *Beistein* があったのは本院と九州帝大病院だけで高く評価されている）

明治二〇年政府は府県庁の庁費を府県立医学学校の経費への支出を禁止したので府立大阪医学校は優秀な薬局長を迎え医学教育に協力させたのであろう。

大東亜戦争が拡大し、多数の軍医急造の必要に迫られ昭和一四年国立の全医科大学に医学専門部が併設され、大阪帝国大学佐谷有吉医学部長兼医学専門部長は「医学部出身の軍医は薬剤官のいる軍病院で働くが医専卒の軍医は単身で大東亜の辺境に赴任して中国人の宣撫や治療に当たるため調剤学を教えねばならないとの教育信念から」大阪帝大病院中室嘉祐副薬局長を医学専門部講師（のち教授）に任じ、医学専門部の医学生に調剤学を講義させた。敗戦となり医学専門部は廃止され、それ以後名実ともに薬学者の医学教育は終わった。

大戦末期に抗生物質・化学療法剤が発見され、戦後朝鮮戦争・ベトナム戦争もあり、米国の懇切な指導によりペニシリンの製造を始めとし、日本の製薬会社は米国並に向上し併せて日本の「薬価基準」は化学構造を異にし

た高価な新医薬品の製造を促し、日本の医薬品は複雑多岐となり、大学の薬理学の教育のみでは医師は完全な薬剤治療が困難となったので、文部省は国立大病院の薬剤部長を医学部教授に、副薬剤部長を医学部助教授に、首席薬剤員を医学部助手に併任して病院長よりも医学部長に直属させて、医学部の教官・学生に薬剤部長・副薬剤部長らが薬剤学的指導できるよう、昭和五一年文部省はまず東京大学と大阪大学の予算案を成立させ順次全国の国立医科大学薬剤部に医学部教授助教授助手が発令された。約一〇〇年前に大阪府立医学校で始まった薬局員の医学教育への協力は、今や全国的な要望となり、近代化されて実現し始めた。

（奈良佐保女学院短期大学）